

新 聞 の 常 識

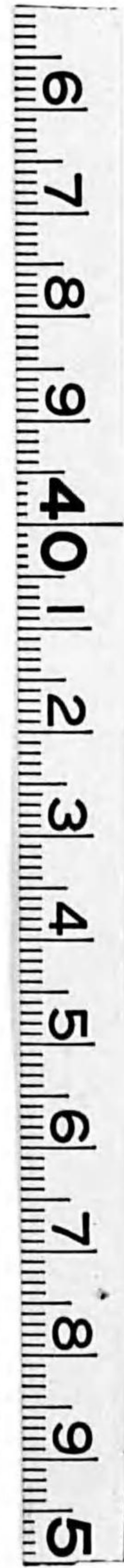
東京朝日新聞社部長
鈴木文四郎



社 會 教 育 ン バ フ レ ツ ト
第 四 十 二 輯



財 團 法 人
社 會 教 育 協 會



始



事業

- パンフレットと雜誌
 一、社會教育パンフレット(月二回)
 二、民衆文庫(月一回)
 三、月刊雜誌處女の友(二日發行)
 講演會及び展覽會
 一、講演會談話會の開催
 二、講習會の開催
 三、講演會及び展覽會の斡旋
 映畫圖書館
 一、優良映畫の選擇推奨
 二、フィルムへの貸付
 三、出張映寫
 四、機械及附屬品の取次
 社會教育の研究調査
 一、内外社會教育施設の調査
 二、民衆娛樂の調査研究
 三、青少年の讀物調査及び選定

役員

會 長	法學博士 男爵 阪
理事 長	東大教授 法學博士 小穗
常務 理事	文部省社會教育課長 小
同	文部省普通學務局長 武
同	文部省實業學務局長 白
同	内務省社會局部長 守
同	中央氣象臺長 藤
同	東大教授 農學博士 那
同	東京日々新聞取締役 須
同	東京朝日編輯局長 原
同	宮内省御用掛 伯野
同	衆議院議員 河
同	衆議院議員 二
同	衆議院議員 緒
同	日清製粉會社社長 城
同	第一銀行取締役支配人 那
同	法學博士 岩
同	田石
同	田榊
同	野上
同	荒方
同	方竹
同	須原
同	屋屋
同	上吉
同	尾部
同	松尾
同	積谷
同	重芳
同	謙重
同	遠郎
同	助
同	吉一
同	夫吉
同	平吉
同	皓平
同	亮亮
同	虎亮
同	德虎
同	三太
同	重三
同	郎重
同	造男
同	宙照
同	明正
同	山正
同	正山
同	明正
同	明正

新 聞 常 識

東京朝日新聞社會部長
鈴木 文 四 郎



社會教育パンフレット

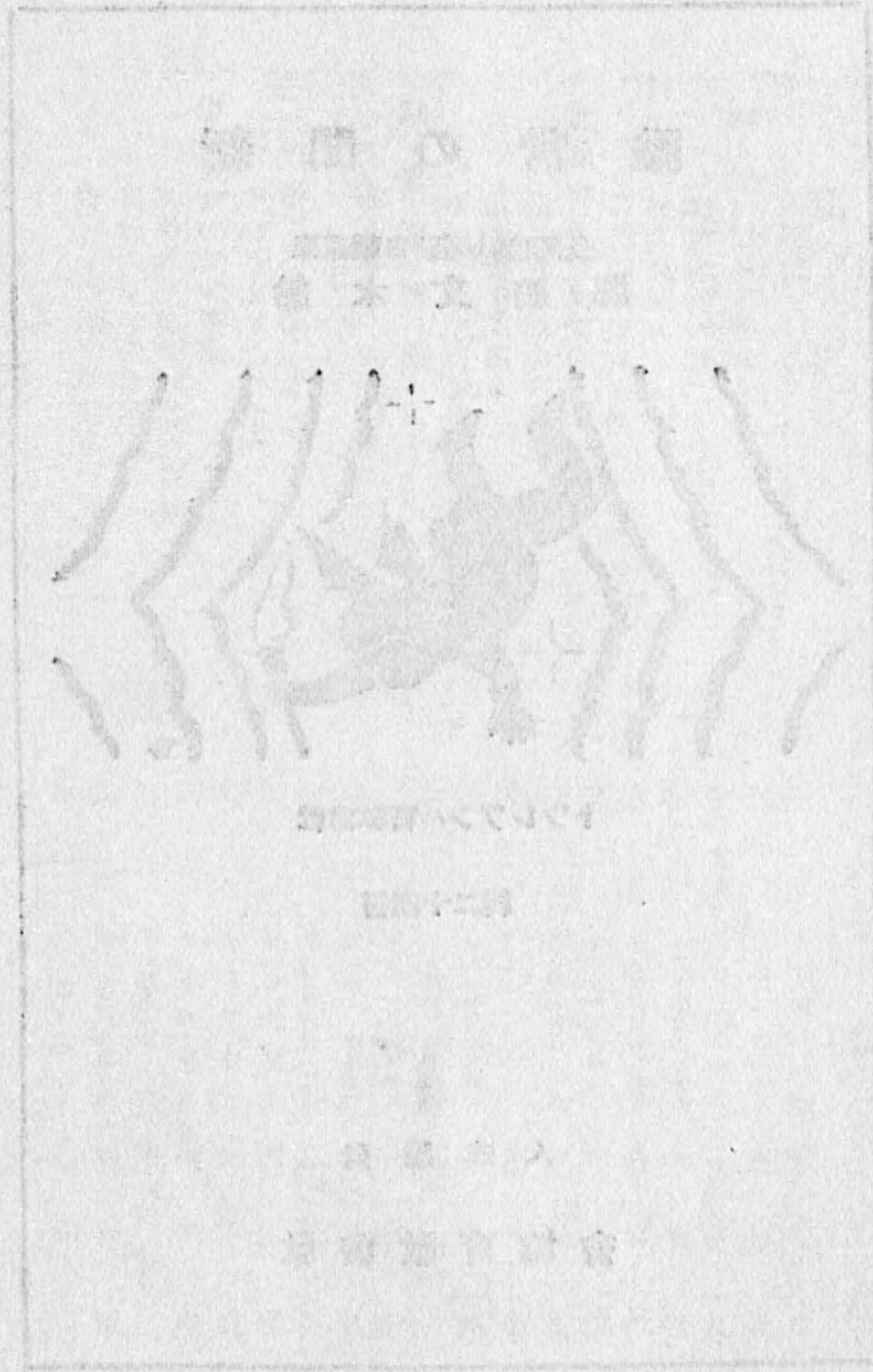
第十四號

財團法人

社會教育協會

目次

新聞紙時代……………一
新聞使命の變遷……………三
新聞の生命……………六
ニュースの競争……………九
新聞社の組織……………三
各部の機能……………四
材料の出所と蒐集法……………一〇
劇的な蒐集……………二
社外からの材料……………四
ニュース蒐集の努力……………七



編輯局の活動……………三
活字から新聞紙に……………一
新聞製作意識……………三
新聞の撰擇法……………七
新聞の讀み方……………四
具體的の注意と參考……………六

目次

新聞の常識

東京朝日新聞 社會部長 鈴木文四郎

新聞紙時代

1
廿世紀の現代の特徴は、いろいろの方面から指すことが出来ます。ラヂオといひ電送寫眞といひ、或は今現に各國に於て發明中の活動寫眞のラヂオ放送といひ、前世紀までは考へもつかなかつた電氣力應用の異常な發達から見ても、これを「電氣の時代」と呼ぶことが出来ます。或は人類發生以來の夢のやうな志願が殆んど完成された飛行機、飛行船の發達から見ても、これを「航空機時代」と呼ぶことも出来ませう。或は又、世界何れの國に於ても、庶民階級、勞働者階級が政治

的にも産業上にも前代までにはなかつた勢力を占めて来たのから見ても、これを「庶民階級時代」と稱しても無理ではありますまい。其他、さまざまの特質を現代は持つて居ります。その中で、最も大なるもの一つは新聞であります。廿世紀は「新聞紙時代」と稱するのが、最も好くこの時代の特徴を總括的に曰ひ表はしてゐるかに見えます。

世界各國は皆それ／＼異つた國力、文化、風習を持つて居ますが、どこの國を見ても新聞紙が非常な勢をもつて發達し、新聞といふものが日常生活に缺く可らざるものになつてゐるといふ點は共通してゐます。それから、各國の新聞紙が國と地方により各々特色はあるにしても、ニュース（新しき事件）を敏速に報道し、輿論や言論の忠實な仲介者となることを責務とする——即ち報道と公論の機關となるといふ事を第一の眼目としてゐるといふ點に於ても各國の新聞は一貫した大なる共通點を有してゐます。この二點から考へて見ただけでも、新聞紙ほど現代に於て普遍的なものはありません。日本は決して世界の一等國ではありませんが——富や文化の程度から見れば三等國かも知れません——、それでも、どんな山間津々浦々へ行つても、其の地方なり東京なりの新聞の行つてゐない事はありません。況んや都市に居住する人々や、文化の程度の高

い國民の間に於ては、新聞は朝食、晚餐の次に缺く可らざる讀み物となつて、日常生活の中に深く織りこまれて了つて居ります。今に於て新聞がどれほど普遍してゐるかを調べるのは、電燈がどれほど實用されてゐるかを調査するのと大した相違はないでせう。なぜなれば電燈の引いてある家庭なら、その下では必ず新聞が讀まれてゐるといふのも大して過言ではないからであります。

新聞使命の變遷

これ程新聞は世界的に廣く行はれてゐるにも係はらず、新聞といふものは一般には理解されてゐません。それは恰度電話やラヂオが普及されてゐても、その原理や實際の理窟が使用者には不問に附されてゐると同様でせう。そこで、本冊子では先づ現在の新聞——少くとも一流の信用ある新聞は、どういふ意識の下に作られてゐるかを説明して見ませう。

世界的の大新聞にしても、田舎の名もない小新聞にしても、現在最も共通な點で、新聞紙の生命とも見られてゐるのは、前にも一寸述べたニュースを一刻も早く報道するといふことでありま

す。新聞發達の歴史を見ますと、其の原始時代はこの國でもさうであります。日本では、「今昔物語」とか「宇治拾遺物語」とかいふ種類の書物も觀様によつては、諸國の見物、即ちニュースを集めたといふ點に於て今の新聞の先驅とも見る事が出来、江戸時代となつて流行した讀賣瓦版即ち赤穂浪士の復讐とか、地震、情死、畸形人物とかいふ種類のニュースを版に起して紙片に刷り、市中を讀み賣りしてあるに至つては、現在の新聞と餘程近よつて來たものであります。又ヨーロッパでも、紀元前六十年の昔にシーザーがアクタ・デイウルナと稱する日刊官報を出して、元老院の決議や軍事上の事件を記述してローマ市民に公告したのが、新聞の先驅といはれて居ります。併し、實際に於て現在のやうな新聞紙の體裁に近いものとなつて、「新聞」といふ意識の下に發行されるに至つたのは、ヨーロッパでは印刷術が發明された十五世紀以後のことで、今から二百五十年の昔になります。その發達時代の新聞の特徴は今日や原始時代のやうにニュースの報道に重きを置かず、むしろ言論や主張の機關でありました。日本でも明治初年頃から民間に出來た江湖新聞、横濱毎日新聞、朝野新聞等を見ても分るやうに、その當時の志士論客、或は時の政府の言論の發表機關でありました。イギリスの青年の理想は「宰相とならずんば、ロンドン

タイムスの主筆となるに在る」とか、新聞記者は無冠の帝王であるとか、社會の木鐸であるとかいふ言葉は皆この時代の新聞紙の理想を曰ひ表はしたものでつまり新聞の使命は意見の發表であつたのであります。

ところが、十九世紀に入り教育が漸次庶民階級に及び、讀む習慣が一般的になるにつれて、新聞紙の種類と發行部数は俄かに激増し出し、それと同時に新聞の顧客は一部の特權階級の手から民衆の間へうつつて來ました。この階級は政治上、經濟上の高遠な理想や議論よりはもつと平易な讀み物、日常の出來事に遙かに多くの興味を持つのは當然で、従つて新聞製作者も漸次意見よりニュースに重きをおかねばならなくなりました。この傾向は年と共に旺んになり、二十世紀に入るに及んでは、世界を通じて「新聞はニュースが第一」といふ不文律が確立されて了りました。日清戦争當時の新聞といへば、今から見れば日本でも随分幼稚なものです。一方知識階級の方でも別新聞は戦報や講和談判の報道に火の出る様な競争をやつてゐます。又、一方知識階級の方でも別な意味で、新聞の意見よりはニュースを尊重する傾向が著しくなりました。といふのは、昔は新聞の社説とか論策記事とかにより啓蒙される讀者が多かつたのが、一般に各方面の専門的知識

が普及して来て、知識階級は新聞紙により指導して貰ふ必要はない、それよりも世の中の有りのまゝの事實を正確に報道して呉れさへすれば、後の判断はこつちで勝手にする——だから、ニュースさへあれば宜しいといふのであります。かうした二つの理由で、新聞の第一の使命は、正確な、善き、敏速なニュースの報道といふことになつたのであります。

だから、昔の新聞記者は筆で書いたが、今の新聞記者は脚で書く」ともいひ、新聞記者の資格の有無はニュース・センスがあるか無いかによつて極るといふ事になつてゐます。實際新聞社がニュースの蒐集にどれだけ真剣に努力してゐるかは、一般の読者の想像外であります。曰ひ換えて見れば、現代の新聞の生命はニュースで各新聞の競争はニュースの競争に他有りません。

新聞の生命

然らば、こゝに問題は、新聞社はニュースの標準をどこに置くかといふ事になります。私は前に「ニュース」の註釋として、大ざつばに「新しき事件」と附けて置きましたが、ニュースの定義は左様に簡單には下し得ないものであります。ごく概念的にいふならば、

一、實際に起きた事件で、日常平凡な事ではなく、その發生が時間的に新しいこと、或は時機に適してゐること。

二、出来るだけ多くの読者の、好い意味の好奇心に訴へることが出来、正確である可きこと。これを具體的にいふと、根據のない想像や豫想は、それが如何に珍奇なものでも價值はありません。又、毎日新しい事件、極端にいへば太陽が東から出て西に入るといふ事實は、人類にとつて恐らく日毎の最大の事件であるが、そんな平凡なことはニュースにならないのに反し、一朝地震となれば、その大小に係はらず、價值が出て來ます。併し、大地震もその起きた當時にこそニュース價值はあるが、後になつては價值がない。尤も、大震災の三週年當日といふ風に、その時機を得れば、その當時の想ひ出や遭難の話もニュース價值は出て來る。又いかに事件としては大きくても、読者の興味を惹く力のないものは、値打がない。例へば、日本の新聞を見れば、近頃は殊に頻繁に殺人事件が出るが諸外國のさうした事件は殆んど出て居ません。併し、事實は、各國に於ても毎日同様の事件が起きて居るのですが、それが日本の新聞に載らないのは、日本の讀者にはアメリカやイギリスの普通の殺人事件は興味がないからであります。又、いかに好奇心を

惹くからとて、猥褻なことや餘りに惨忍なことは價值がありません。而して、かういふ諸條件を一貫して最も重要なことは、それが正確である事でありませぬ。

新聞社内、ニユースを不斷に蒐める時の標準は大體かうした目安から出て居るものであります。同一の事件を扱ひながら各新聞により、或るものはそれを大きく精しく掲載し、或るものは、小さく簡単に扱ひ、或るものは全然載せないことのあるのは、ニユースに對する新聞製作者の見解の相違から來る爲であります。たとへば、茲に某華族の令嬢と新聞配達夫の心中事件があつたとした場合に、Aといふ新聞の製作者は、近來珍らしい前例のない事件として四段抜きの記事で令嬢と配達夫の戀のいきさつ、やら心中の動機、決行場所、さては双方の両親の悲嘆の話までものせるでせう。B新聞の製作者は、華族の令嬢といふことが十年昔ならこの事件としては大事件であるが、もう華族の令嬢だからとて、さう大騒ぎをするには當るまい、先づ普通の心中事件より少し許り大きく扱へといふので、二段抜き程度の記事にして片づけて了ふでせう。C新聞の製作者に至つては、かういふ事件を大きく扱ふのは、社會風教の上から面白くないといふ見識から、一段の見出しで、十行ほどで紙面の隅の方へそつとして置くか、或は全然捨てて了ふでせう。

この三新聞、三様の態度は、今述べた様に、それ／＼理由のある事で、何れが絶対に正しいとも間違つてゐるともいへませぬ。然し、こゝに注目すべきは、新聞製作者の考へ方でニユースの價値が變ることにあります。新聞記者や經營者の人格の高下が、直ぐにその新聞に表はれるのは、全く右に述べた様にニユースに對する標準なり、判斷なりの相違から來る爲であります。

ニユースの競争

競争といふ言葉を、最も具體的に表はしてゐるものは現代では新聞のニユースの競争以上のものはありません。新聞は毎日競争するのでなくて、實は毎日時々刻々に競争してゐるのであります。東京の大新聞の例を取つて見ると、夕刊を出して居る新聞は地方へ行くのと、市内に配ると二版作ります。地方へは早く積出す必要上、午前十一時前後に原稿を切り、それまでに昨夜地方版を切り後に起きたニユースを入れます。それから午後二時前後までに起きたニユースで市内の讀者が今朝の新聞で讀んだ以後のものを總て入れて夕刊市内版を作ります。それがすむと先づ明日の地方行きの朝刊の製作にかゝります。北海道とか北陸とかいふ地方へもその日の日附

の新聞を配達するがためには、輸送に要する時間を計算して、成たけ早く前日の中に東京から送り出さねばなりません。従つてかういふ遠隔の地へ送る東京の新聞は、前日の午後三、四時頃に原稿をメ切ります。

それから、仙臺とか、名古屋とかいふやゝ近いところになると、メ切りを午後六、七時頃に、更に静岡、水戸、千葉といふ風に東京へ近い所になるに従つて、メ切の時間を後に延ばして出来るだけ前日の遅くまでの多くの、好いニュースを入れる事に努めます。東京の市内版になれば、重大なニュースのある場合だと、たとへば内閣の更迭だとか、大火事とか、顯要な地位にある人物の臨終とかいふ場合にはその日の午前の二時頃までのニュースを入れて、市内の讀者の朝食の前にくばるやうにします。だから、讀者から見れば、朝刊と夕刊だけ一日に二度の競争のやうでも、實際は右に述べたやうに、夕刊だけでも二度、朝刊で四回乃至六回の競争をしてゐる勘定で、文字通り時々刻々に競争を續けてゐます。

…ニュースの競争について見逃してはならないのは、新聞社の所謂「特ダネ」の競争であります。これはニュースを生命とする現代の新聞の當然の勢で、同一のニュースに就いては他新聞より

一刻でも敏速に、一行でも多く、寸分でもより正確ならんとする競争心が、もう一段押し進んで行くと、他新聞には出ない自社だけ独占的のニュースを得たいといふ事になります。これを特別の「タネ」即ち新聞界では「特ダネ」と稱します。讀者はよく氣のつく事でせうが、それほど事件とも思はれぬことが、他の記事に比較して不釣合に大きく取扱はれる場合が往々あります。かういふ場合、注意して見れば、それは大抵その社の「特ダネ」であるからで、新聞製作者はこれを讀者に誇示する心持が手傳つて、その様に大きく掲載されるものと見て間違ひありません。新聞記者が朝早くから夜遅くまで、時には事件によつては一週間でも十日でも殆んど不眠不休に活動するのは、皆このニュースのためであります。併し、いかにニュースのためでも、單にそれが仕事としてやるのなら、さう懸命には出来るものではありません、そこには、この道に入つた者でなければ知れない興味があるのであります。いかなる勞苦も、一度自分の書いた記事が大地的「特ダネ」として紙面に出たのを見た瞬間に完全に忘れ、自ら十分に酬いられた氣持ちになるのであります。恰度それはスポーツマンがランニングなどに第一着として優先した時の氣持と同じで、それまでの死ぬやうな苦しみも忘れ、賞牌を授與される事も眼中にない快感でありま

す。

これがために、正しい新聞記者は、努力も報酬も度外して活動するのであります。だから、金品や利権では誘惑されない正しい記者も、「特ダネ」を提供されれば、喜んで提供者の正當な交換条件に應じたり、或は又特種を得るためには、或る種の屈辱も甘受して氣に染まぬ人物の後をも追ふのであります。

これで、新聞に於ける本来のニュースといふものゝ關係と價値とが略説明出來たといたします。勿論、新聞を開いて見れば誰でも一目して氣がつく様に、右に述べたやうなニュースの他に、論説、寄書、小説講談、文藝記事、漫畫、笑話等さまざまのものが載つて居ります。併し、之等も新聞に載るからには矢張りニュース價値ありとして載せるもので、廣い意味でのニュースと呼び得るのであります。

新聞の比較、新聞製作者の見識、新聞の出來榮え、それから新聞及び新聞記者に對する理解と同情を持つためには、以上に述べたことが新聞に關する根本の基礎知識であらうと思ひます。

新聞社の組織

前に述べたやうに、現代の新聞紙の最大特質はニュース本位であるといふ點であります。従つて新聞製作の機關なり組織なりは皆それを第一の主眼として作られてあります。即ち最も確實に且つ迅速にニュースを蒐め、同時に敏速に新聞紙に印刷するに適當な方法が工夫され、今ではこの新聞社にも共通な一定の型が、新聞社の組織の上に出來て居ります。恰度これ、商會社や工業會社で、その取扱ひ品や製品は各々違つて居ても、販賣部とか技術部とか庶務部とかいふやうに別れてゐて、組織の大體は何れもそれ等と同様であります。

一體新聞社の組織は多くの意味に於て二元的に出來て居ります。その第一の例は營業と編輯の對立であります。如何に新聞記者の理想が高くても、一面新聞が商品であるといふ事實は否めません。此商品としての新聞を經營して行くのが新聞社の營業局（日本現在の大新聞の多數は局といふ名稱を用ひてゐます）であります。併し茲には夫に對立する編輯局の組織を順序上先づ説明して見ます。之を大體圖解すると左の如きものが各社を通じて一般的のものとなつてゐます。

主筆—編輯局(長)
(論說部)



これは編輯局を形成する主腦部であります。更にこの他に新聞の大小や種類により、學藝部調査部、寫眞課、商況課、校正課、庶務課といふやうな部とか課とかいふ名で各専門の仕事を持つた部門が置かれてゐます。

各部の機能

編輯部

營業局に對し新聞製作に關する實務一切を取るところで、編輯局長はその主宰者として其の

任に當ります。(或る新聞ではこれを主幹と呼び、又或る社では編輯局長の補佐を主幹と稱してゐます。)主筆は編輯局長の上に居つて、主として社論とか社説とかいふ社全體としての意見なり方針なりを主導する役目を持つてゐます。

整理部

各部から出る原稿を取捨選擇して、標題を附し、適當に排列編輯する役目で、整理部長はこれを統轄します。即ち極くありふれた記事であるなら、部員の常識に任せて取扱はさせますが、重要な記事になると整理部長はそれに考慮を加へて、或は特に大きくし又は小さくし、時には全然捨てる事もあります。又新聞の編輯上の體裁、たとへば大小さまざまの活字を巧みに使用して見易く読み易くするとか、記事の内容に従つて嚴肅な紙面を作るとか、華手に賑やかな調子を出すとかいふ様に編輯上の方針は皆整理部長の考に従つてなされるものであります。一言にしていふと、この部は原稿といふ材料を活用して新聞の仕上げをするところでありませう。

政治部

政治部は國內の政治、外交問題、即ち府縣政、市政、教育、陸海軍等にわたり廣汎な國政の動

きを主として取扱ひます。それがために、内閣、各政黨、各省（宮内、農林、商工、大藏、逓信を除く）貴衆兩院、市等にはそれ／＼責任の記者を配屬させて置きます。政治部長はこの記者を指揮し、記事を其の手で統一して整理部へ出すもので、この部は議會中とか、政變とかいふ場合は最も活動を要するのであります。

經濟部

經濟部は編輯局内にあつて他の部に比較して専門的な性質の部で、公經濟と私經濟を合せて國內と國際的とを問はず經濟に關する一切の問題を取扱ひます。それがためこの部の記者は各省（大藏、農林、商工、逓信）銀行會社、取引所、商業會議所等をそれ／＼分擔して財政、金融、商工業、農業等に關する記事を作製します。この部は仕事の性質上豫算編成期とか、實業界に特別な問題の起らない限り、常に平均した分量の質實なニュースの蒐集に努力します。部長が居て一般記事の集成を指揮するのは他部と同様であります。この部はその編輯を自らすることになつてゐます。どの新聞にも見られる所謂經濟面や相場欄はこの部が自ら蒐めたニュースを自ら編輯するのであります。これは經濟面が専門的なものであるが故で、經濟部のニ

ユースでも國の豫算とか著名な銀行の破綻とかいふ様に、公經濟の記事や其の他一般的の興味あるものは整理部にうつして他の紙面に編輯されます。

社會部

社會部は政治部、經濟部と共に日本の新聞の根幹であり、全般的の問題は前記二部の領域以外ものは殆んど總てこれを取扱ふと云つても過言でありませぬ。東京の新聞の多くの朝刊第七頁はこの社會部の記事を以て埋つて居ますが、この面を見ても分るやうに一般社會的事件及び問題、火事、洪水、地震等の天變地異等までその活動の對象である許りでなく、政治問題や經濟問題でも或は解說的に或は興味的に取扱ひます。昔は政治部や經濟部を硬派と俗に呼び、社會部を軟派、又は三面（新聞紙が四頁であつた當時はこの部の記事が第三面に載つたからです）と呼んだことがあります。軟派といふ俗稱は或る程度までこの部の記事の特性を捉へてゐます。社會部の記者の他部と相違してゐる一つの主要な點は、他部の記者は前記のやうに各々分擔してゐる部門が定つてゐるのが大部分であるのに反して、この部では分擔の確定してゐる記者よりも、遊撃として無任所で刻々に事件の起るにつれて活動する者の方が多し事あります。定つた受

持ちとしては、宮内省、裁判所、警視廳及警察、憲兵隊、市役所、鐵道省等がありますが、その他氣象臺、ホテル、劇場等にも定つて記者を訪問させる社も可成り多い。この部には寫真と漫畫家が附屬するのが一般の例になつてゐます。

通信部

通信部は東京以外の各地に常置してある通信員から送つて来るニュースを扱ふところで、東京大阪等、大都會の大新聞は全国的に通信網を張つてゐるので、その仕事の範圍は中々廣汎で、地方に起る事件であるならば、皆先づこの部の領域に入ります。大都市の新聞は其の都市の讀者のみならず、全国的に讀者を有してゐるので各地方に對して、所謂地方版を出しますが、その編輯もこの部で司ります。

外報部

海外の外交問題のニュースを初め各國の大事件は、皆電報により通信社又は特派員から打電されて來ますが、それを翻譯し解説を附するのがこの部の主要な仕事になつてゐます。

其他各部

この他論説を主として書く記者を或る人數定めて、主筆（又は編輯局長）の下に論説班とか部とかいふ名を附して居る社もあります。これは多くの場合各部の部長が兼任してゐます。又文學美術等の讀物を主として扱ふ學藝部、スポーツに關する一切の記事を扱ふ運動部、記事を書く時に必要な材料を平常蒐集したり、寫真や著名な人物の官位の變動を常に注意して索引を作つたりする調査部、經濟部の別動隊として株式、米穀、生絲取引所等に入出して刻々に變動する市況を報道する商況係、原稿と讀み比べて誤字誤謬を校訂する校正係、紙上の活動以外に各種の催しものを行つて社の宣傳事業を行ふ事業部或は計畫部、各地からの通信や、本社からの出張記者が電話で送つて來るのを先づ速記でとつて書き直す電話係等さまざまあります。これ等の部や係は各社一様ではなく、或は獨立し、或は他の部が兼任したりしてゐますが、この種の仕事はいかなる形式にもせよ、どんな小新聞でもその組織の中に入れてをります。

以上が、大體現在の日本の新聞を製作して行く組織の根柢となつて居ます。大新聞と小新聞、機敏な新聞とのろい新聞、或る特別な記事なり事業なりに特色の有つたり無かつたりする新聞——といふ風に、各新聞に皆それく優劣あり特色を異にするのは、要するにこの根柢の組織の

完全不完全、または主力を注ぐ點の相違から起つて來るのであります。

材料の出所と蒐集法

よく世間では、新聞に對する識辭として「どうしてこんな事をこんなに早く知つたものだらう」といひます。實際今日の新聞はその材料の範圍が驚く可きほど廣いので、新聞社内に居る者でも、新聞が刷り上るまでは、自分の新聞の編輯室へ集つて來てゐる總てのニュースは知り得ない程多種多様であります。この多種多様のニュースが驚く可き速力を以て蒐められるのは、全く多數の記者が出勤して新聞の耳となり目となり、あらゆる機關を利用し、あらゆる便宜を求めて活動するからであります。

新聞の材料はその出て來る、或は集める次第からいへば、豫定的なものと偶發的なものと二大別することが出來ます。又種類によつて別れば、官公立の諸機關に關するもの、社會人事百般の私的關係のもの及び自然界の諸現象といふ風に三様に別けることも出來ます。更にこれら蒐集の努力の上から云つて、自然に取り得るものと、特別な努力によつて初めて探知し得るものといふ風に

に別けることも出來ます。その出所は千差萬別であります。豫定的に自然に蒐め得るものは、前に述べた諸官省やその他の官公立の機關に於ける發表物であります。かういふところには各社から詰めかけてゐる記者が、たとへば外務省なら霞俱樂部とか、政友會なら十日會とか、商業會議所なら何んだとかいふ風に團體をつくり、そこから發表されるものは各記者が同時に取るといふことになつてゐます。併しかういふところでも、發表されるものだけを書いてゐては、記者の一人前の仕事にはならないので、自發的に或は社からの命令により、更に突込んで當局者に當つて各自の思ひ／＼に従ひタネを聞きとるのであります。

劇的な蒐集

併し右のやうな場所から來たタネだけでは現在の新聞は出來るものではなく、どこの新聞社も常に眼を光らせて努力してゐる特ダネ——即ち、他社には出ない自分一社だけの特別の材料——はもつと偶然的な場所から出るのであります。

その第一は、噂の「聞きこみ」であります。新聞社ほど人の噂に對して鋭敏なものはありません。

ん。話す相手は何気なく何んでもないやうに話してゐることでも、これを新聞記者がニュースを働かして聞けば、立派なニュースであり又はその手がかりとなるのであります。東京の新聞社ではどんな小新聞社でも編輯局に五十人位の記者が居り、大きな社となれば二百人位の記者が居るので、それが毎日ニュースセンスを働かすことを第一の職分として世の動きの中心點へ出入して働いてゐるのですから、いろいろの噂が耳に入り目にふれて來るのであります。或る記者は社へ出勤する電車の中で、隣席にゐた二人の女が「あのお屋敷のお嬢様は、繼母のやり方が餘んまりひどいのでとうとう昨夜自殺の書き置きをして家出したさうな、いくら華族様でも……」といふやうな話をするのを耳にするや、忽ち自動車に乗り換へて社へ走りこみ、市内と各地の通信員に上流の令嬢風の娘の自殺事件の有無を調べさせ、一方警視廳詰の記者と共にその刑事部や各警察署方面に活動して、午後一時半の夕刊のメ切りまでに、その電車内の噂の當人の自殺事件を立派な特ダネとしたといふ例もあります。

或は又、議會の廊下で政黨の領袖が「今日はもう重大議案も何も聞く必要がなくなつてゐるではないか」と立話してゐたことや、一流紳士の俱樂部の食堂で「おい今夜の中に烟草はウンと仕

込んで置いた方がよささうだぜ」といふ冗談口を開きこんだ許りに、それをヒントにして、その夜の中に内閣員の大更迭とか、官營煙草の總値上げとかいふ大々的な特ダネをつくつたこともありまます。かういふ風にして材料の手掛りを得るのは、所謂記者の第六官を不斷に働かせる結果で、特ダネは多くかういふ徑路で得ることが多いのであります。

第二は、特別な關係筋からの情報によるものであります。「隠すより現はるゝはなし」と昔からいはれてゐますが、「秘」とか「極秘」とかいふ赤印を好んで書類へ押したがる政府の役人でも、「どんな事をして新聞社へ絶対に總ての政府の秘密を保つことは全く不可能だ」と言つてゐます。ヴェルサイユ講和會議の時でも、各國の全權の密議が、翌朝のバリーやロンドンの新聞に毎日出ました。すると英國の全權ロイド・ジョージは業を煮やして、これは會議に直接關係のない各國の全權が多く出席し過ぎるからだ、この講和に最大關係を有する英佛米伊の四ヶ國の全權だけにしようといふので、所謂四大巨頭會議にしてつた。ところが、それでもその翌日の新聞には前と同じにどしどし會議の秘密が素破ぬかれました。そこで更にロイド・ジョージの提案で、ビッグ・フォアを英佛米の三大巨頭會議にして、もうこれなら大丈夫と安心したところが、其

の翌朝はパリーの新聞には出なかつたが、當の英國のデーリー・メールには依然として會議の内容が出たので、さすがのロイド・ジョージも面目玉を失したといふ話もあります。これ等は皆新聞社はあらゆる因縁を關係筋にたどつて情報を手に入れるからで、その方法は無論一定したものではないので、こゝらが新聞社の活動の最も劇的な方面の一つであります。

社外からの材料

通信社

いかに新聞記者が全身を耳と目にしても、それだけではこの廣大な世相の鏡となることは不可能なことで、新聞社はニュースを蒐めるためには社外からの材料を取ることにも力を入れるのであります。その第一は通信社の材料で、通信社といふのは新聞社と殆んど同じ方法でニュースを蒐めて、これを各新聞社に賣るのであります。我國では、今のところ日本電報通信社、帝國通信社などは一般的なニュースの供給者として相當に大きな組織で勢力を有してゐます。この他官内省や内閣、演藝界、スポーツ、婦人家庭等各専門をこしらへて、特殊なニュース許りを精密に供

給するところもあります。そして一日一回或は數回、ニュースを謄寫版にして各新聞へ配達して來るもので、これを受け取つた編輯局の關係各部では、或る場合はそれをそのまま信用し、或はそれを手がかりとして更に必要な點を調査して材料とします。又國內の通信社の他に、外國の通信社の材料を使用することは、前に外報部の説明で説明した通りであります。國際的にニュースを供給する外國の通信社として世界的なものでは、イギリスのロイテル（路透）アメリカのアツソシエテッド・プレス（米國新聞聯合通信社、略して米聯又はA・P）、同じくユーナイテッド・プレス（合同又は、U・P）フランスのアヴス（ハヴァスとも呼ぶ）等であります。この中、米聯（A・P）はアメリカの著名な新聞社が聯合して各自の共同の利益の爲に組織してゐるといふ點で、他の株式會社組織の通信社と趣を異にしてゐます。日本でも最近これにならひ、東京、大阪等の一流新聞社が集つて、從來の國際通信社の組織を變更して、日本新聞聯合通信社をつくりました。此の頃の新聞の外國電報に「聯合」としてゐるのは、この通信社から出たニュースであります。

通報員と囑託

厳格にいへばこれは社外の者ではありませんが、大都會の新聞社では社會部の所屬の下に市内通報員を置き、大きな社では各區に一人專屬の人を夕方から市内版のメ切りの十二時過ぎまで、區内の警察署を廻らせます。警察署は刑事事件を始めとして衛生、交通その他市民の日常生活に最も深く觸れた仕事をしてゐるので、新聞に取つては重要な材料出所なので、特にこのやうな制度を設けて、一夜の中に何回か各警察署を廻つてニュースを蒐めるのであります。又これとは別に大學とか、研究所とかいふ所の専門家を囑託として新しい研究や発見、又はそれに關係した興味あるニュースを書かせるなり知らせるなり依頼します。或は又自分の新聞の配達夫に命じて、その見聞したものでニュースになるものは何んでも電話で報告させたりすることもあります。配達夫は大新聞になれば市内だけでも千人位は居るので、これが朝夕配達の途中見聞することは中々早く且つ數多いのであります。

官報及び其の他

その他官報なども立派なニュースの材料であり、各會社の印刷發表物、諸會合の招待状、投書等も一見平凡な様で、時には重大なニュースの手がかりとなるのであります。

ニュース蒐集の努力

ニュース材料の出所は大要以上に述べた通りであります。これを蒐めて完全なニュースとする苦心は一通りではありません。例へばありふれた火事の記事でも、これを紙面の上に一個の完全な記事として出すには、焼失家屋と區域、主要建物、原因、出火と鎮火の時刻、損害高、保険、炎焼の光景、若しそれが大火災であるならば避難民の状態、善後處置等の項目は必ず入れなければならぬ。これをその混雑最中に火事場へ駆けつけて、場合によつては三十分か一時間位の間に要領を得て了はなければなりません。

或は又、読者が読んで見て、すら／＼と一分とかよらぬユーモラスな左のやうな記事があります。

何日午前何時頃、京橋北紺屋署の前で樽繩を滿載した荷車を道傍へ置きつばなしにして二人の男が格闘を始めた。この中の一人は、他の一人を警察の中へ引きずり込まうとするらしい。格

園が三分間と續かぬ中に、警官が三四人ばらばらと飛び出して来て二人を一緒に署の中へ引つ張つて行つて了つた。取調べて見ると、この中の一人は〇〇區〇〇番地の空樽商〇〇〇〇といひ、今朝商買の空樽の繩を買ひ集めて右の荷車に積みひいて来たが、干梅雨のむれるやうな暑さに眠くなり、敷寄屋橋公園の木蔭に車を置いて、繩の中へ入つて眠つて了つた。しばらくしてふと眼が覺めると、自分の車はどん／＼動いてゐる。見ると二十七八の男が車をひいて居る。こいつてつきり空巢——いや空車ねらひに違ひないと思つたが、わざと警察署の前まで来るのを待つて居ると、誂へ通り北紺屋署前へ来たので矢庭に飛び降りて、格闘を始めたものと分つた。車泥棒は〇〇縣〇〇町の△△△といふ男で、縣立中學まで出た相當の家に生れ、苦學の目的で上京したが、職業はなし腹は空り、當て途もなく市中を徘徊中、右の荷車を見付け早速繩商を始めようと思ひ、當てもなく曳き出したものだと言ふところを申し立てた……

これだけの記事を書くには可成な努力が拂はれます。第一警察の前で二人の男が格闘を演じ、一人はその荷車の持主で一人はそれを盗まうとしたものであつた、といふだけの情報を市内通信

員が社會部にあてゝ寄越したとします。二人の住所姓名職業等も警察の手で分ります。併し、それだけなら何んの變哲もなく記事にする必要もないものです。併し空樽屋の方が盗人を警察へ引つぱり込まうとしたといふのは、何か可笑しなわけがあるらしいといふ社會部長の注意で、もう一度警察へ電話をかけて見る。すると、それを取調べた司法主任は交替でもう歸つたが、つまらない事件だから引繼ぎはないといふ。そこで空樽商の家へ記者が自動車で出かける。夕刊間際になり今日は是非ユーモラスな讀物の一つ入れたいといふ社會部長の計畫であります。メ切り間際になつて自動車で行つた記者から電話がかゝつて来る。警察で發表した番地が違つてゐるので探すのに半時間以上かゝつて遅くなりましたが、話は非常におもしろい、かうかういふワケだといふ。その電話を取つた記者が早速原稿に書く。部長なり次長なりがそれを讀んで見て、折角ユーモラスな記事がこれでは書き方が堅過ぎるから、軽く書き直せと命じ、その上更に筆を入れて、やつとメ切りに間に合はせる。わづか二三十行の記事で、讀者は夕食の食卓でふふんと一寸笑ふだけの小さなものでも記者の手に三度かゝり自動車を使用时に時間は二時間位ゐるの努力が拂はれるのであります。

或は、たとへば東京に在住してゐる。或る中將が割腹して今朝死んだ」といふ丈の確實な噂を聞いたとする。之を確める爲には、陸軍關係のあらゆる所への記者が飛んで行く。どうしても分らないとする。現役と退役とを一緒にして在京の中將は五十人以上もあるが、片つばしから自宅へ電話をかけて其電話へ出て應答する先方の話しの態度で、手がかりを得る事もやつて見る。更に陸軍關係の病院、衛戍病院とか赤十字病院とかいふ所へ記者を派してそれとなく探る事もします。

市井の一寸した可笑し味の記事や、自殺事件にしてもかうであるから、沉んや政變であるとか新内閣の顔觸れであるとか、大震災や火山の爆發、船の沈没、大洪水等の大事件に至つては記者は必ず現状に出かけて、新しい材料や寫眞を手に入れなければならぬから、その努力は文字通り命がけの場合もあります。世間では新聞は間違つたことを傳へて怪しからぬとよく言ひますがそれは信用ある新聞では全くの誤りから出るもので、悪意から誤報をなすものでは決してありません。その誤は、ニュースを一刻も早く讀者に提供しようといふ競争からくるもので、どんなに正確に精しいものでも一度他の新聞にその大略でも出て了つたものは、記者の側からいへば無

價値なものとなつて了ふ。あれだけのニュースを扱ふ中、讀者や關係者が正誤を申込んで來るものだけが誤りでありとすれば、私はむしろ新聞の所報の正確なのに驚く可しだと思ひます。何故なれば一家親戚の中で或る事件が起きてそれが親類中に傳つた場合でも、必ずその先きでは元の話とは違つたものが傳へられてゐるからであります。兎に角、新聞が良きニュースを正確に報道するためには、その行間に讀者の想像し得ない記者の血と汗の努力が織りこまれてゐることを知つていたゞかなければなりません。

編輯局の活動

以上述べたところで、現在の新聞が編輯上に於て主眼とするところと、それを達成するために必要な組織と努力の一般が了解されることと思ひます。そこで、更に進んで、新聞編輯の機能がどういふ風に動くか、それを描寫的に記述して、新聞製作の活動状態を説明して見たいと思ひます。

新聞記者はいつも朝寢坊の宵つ張りといふ時代は、もうとうに過ぎて、ニュース第一の時代と

なり、夕刊が二版に分けて發行され、競争が日増しに激烈になりつゝある大都會の新聞社内では編輯に携はる記者は、内勤者も外勤者も、それぞれの勤務割に従つて朝も早くから部署に就かねばなりません。

『早出』の勤務記者は朝の八時から九時までには續々と編輯局へ出勤して來ます。この中でも整理部員と社會部員は、その仕事の性質上常に必ずその出勤が嚴格に必要とされます。政治部や經濟部は、政變の際とか議會開會中とか、經濟界に特別な事件の起きてゐる際とかでない限り、多くは豫定された事務を扱ふのでありますから、必ずしも『早出』を必要としないこともあります。が、整理部や社會部は、勃發事件——例へば火山の爆發、大地震、火事、著名な人の異變といったやうに——を常に豫想し、場合によつては直ぐにも號外を出さねばならない必要がありますから、この兩部の部員は、實際上、新聞のニュース本位の職能の第一の警戒者として出勤して來ます。

かうして早く出勤して來た整理部員は昨夜といふよりも今晩、市内版を編輯した部員とそれ／＼事務の引継ぎをします。

『昨夜は政治部のタネが足りなくて困つたから、秩父宮のアルプス御登山の寫眞を、今日の豫定で取つて置いたが出して了つた……社會部の方は多過ぎて困つたよ、今朝の紙面に出てゐる他に「可哀さうな兄弟の家出」といふのと、「大學生の新映畫運動」といふのが残つてゐるが、腐るまゝと思つて夕刊に残して置いた……』

『〇〇新聞は××事件を馬鹿に大きく扱つてゐるが、ウチではあれは落したかネ』

『いや、あれと同程度のものが整理部へ廻つたが、幹部と電話で相談した結果、出所が少し確かでない點があるのと、經濟界に異常な混亂を起させる心配があるので、もう少し保留して置かうといふ事になつた……』

社會部の長大な机の端には、部長と次長が向ひ合つて椅子に腰かけ、今日の夕刊の作製について協議を始めて居ます。

『〇〇事件の審問で大阪から検事が昨夜の急行で上京したといふから、國府津まで行つて車中談を矢張り念のために取らせませう。寫眞は東京驛に下車のところ結構でしょう。』

『チブスが市内に馬鹿に流行しだしたやうだから、是非又豫防法の話を出させよう——警視廳の

衛生部の話で好いでせう。それから、今日も非常な熱さのやうだが、水邊の寫真も續き過ぎたから、暑熱の中で働いてゐる人の圖柄のいゝ寫真を一つ出させようか……」

「それから今日の主要記事（最も目立つ記事として大きく取扱つて載せるもの）の豫定が今のところ未だないが、市役所のA君に話して市内の夜間徒弟學校の最近の模様をまとめて書くことにしませうか、それとも宮内省のB君に話して皇孫殿下の御近況か、兩陛下を始め皇族方の御避暑の御近況をまとめて書いて貰ひませうか。——兎に角電話で打ち合せて見ませう。」

そこで、外勤記者を直接指揮する任にある社會部の次長は、市役所、宮内省にそれ／＼詰めてゐる、A Bの兩記者に電話をかけて前記の記事を夕刊に間に合ふやう書く事を命じます。その中に各通信社からの通信が續々と配達されて來ます。社會部だけでも六七種のもものが、一社一日一回乃至五六回時間をおいて配達されて來ます。その中には宮内省關係を専門にしたもの、婦人關係を専門にしたもの、演藝を中心としたもの等の専門的のもの、總てのニュースを取扱ふものとあります。大抵は粗雑な紙へ、謄寫版で刷つたもので、これを自轉車で各新聞社をぐる／＼配達し廻るのであります。（勿論それは、月幾何といふ料金があります。）この通信社からの通信は、

今迄のところでは甚だ不正確のものが多いのですが、それを取るのには、参考として事件のヒントを得る手がかりにするためであります。記事の信用に重きを置く新聞社では、通信をそのまゝ出すといふことは絶體になく、直ぐそれに基づいて關係者に電話をかけたたり、記者を派すなりして確かめさせます。〇〇通信によると、東北線の一ノ關附近で汽車の衝突があつて、死傷が多いと的確らしく書いてあるが、一つ確めて下さい。——鐵道省へ詰めかけてゐるC記者に命じます。

「淺草公園の人出で、主義者が宣傳ビラをまいてゐるところへ右傾團が押しかけて大亂闘が始つたさうだ——今、市内通報員から知らせて來た。若しかすると兩方の有名な連中も居るかも知れないから、自動車で寫真と一しよに行つて呉れ玉へ、時間があつたら、警察署へ廻つて、委しい事情をきいて呉れ玉へ」——外交主任は、自分の机の傍にゐるD記者に命じます。

その間、各官公署に詰めてゐる記者や市内通報員から、打合せや、報告の電話がひつきりなしにかゝつて來ます。その中、重要な電話には部長や次長が一々應接して指揮します。通報員からの電話は、他の記者が一々きいて直ぐその場で原稿にします。十一時頃になると、各所に詰めてゐる記者からの原稿が續々と自轉車やオートバイに由る社の原稿運びの手で机上へ届けられます

部長と次長は一々これに眼を通し、不正確と思はれる點や足りない點を電話に執筆記者をもう一度呼び出して、訊して加筆した上で整理部へ廻はします。

略ぼこれと同様の活動が、材料を蒐集するための他の部によつても同様の方法で行はれます。政治部では、これが議會中であれば、この部に屬してゐる記者の八部通りは議會へ詰めて了ひます。それは各大臣を始め官廳の主腦部や政黨の代議士以上のものは皆悉く學つてこゝへ集つて了ふので、政治の中心が事實上議會へ移つてゐるからであります。議會開會中は議會そのものの記事がこの部から出る原稿の大半で、従つて議會内でこれを書き敏速に社へ送るためには非常な努力を續けます、數人の原稿運びは原稿をわづか十枚位づつを間斷なく運びます。

政變の場合、重大な政治問題が起きて内閣が動搖し出したとなると、政治部の活動は社内でも殊に目立つて來ます。政治部長と次長とは朝早くから深更まで、机上の電話を前にして諸方面へ出かけてゐる記者と連絡をとり、正確な情報の蒐集に努めます。いよく内閣が總辭職となつて後繼内閣の首相が判然としない場合には、その候補者と目される人々や元老の邸宅へは若い記者達を見張りに立たせて、そこに出入する主要な訪客の顔ぶれを一々政治部長は電話で報告させま

す。老練な記者等は、かういふ場合のため平素から親しくしてゐる官界や政界の關係者や消息通の間を自動車でかけ廻つて情報を集めます。不思議なもので、かうして努力してゐる中には、どんなに秘密にされた事でも、一日の活動の終りには十中の八九目鼻がつかます。

又、地方通信部は東京以外の地方に起きた事件につき、地方の通信員から電話、電報、書き原稿により絶えず通信を受け、其ニュースが全國的の興味のあるものは、本紙の方へのせるために社會部長なり政治部長なり、或は直ちに整理部長なりの手許へ持つて來ます。それを受け取つた各部長は、そのまゝ載せるなり、或は場合により更にその記事を基として必要な事柄を附加するために所屬の記者を活動させます。例へば長野縣で警察署廢止問題で縣民が騷擾を起したといふ記事が起きたる場合にはこれに對する内務大臣なり警保局長なりの談話を取るとか、騷擾者所罰に對する檢事總長の意思を訊くとかいふ事を直ちにします。

この部では一方に於て、地方版なるものを編輯するのが主なる仕事になつてゐます。これは日本の大都會の新聞の大なる特徴で外國には殆んど例がありません。日本の大都會の新聞は、その發行地の附近で購讀される許りでなく、全國的に讀者を持つやうに努力いたします。その結果地

方の讀者に對して、その地方のニュースだけを特に詳細に報道する必要があるもので、こゝに地方版なるものが出来て來るのであります。例へば房總版、宮城版、北海道版等が皆それゝその地方の讀者のために作られるものであります。

この他、經濟部では私經濟を扱ふところの銀行會社等へ出入する記者、公經濟を扱ふところの大藏省、商工省、農林省、逓信省等へ出入する記者（勿論双方とも、公私兩經濟にわたる事はありませんが）、商況専門の記者等、それゝ分擔に従つてその日ゝのニュースの蒐集に活動します。殊に毎日時間的に忙しいのは商況記者で、取引所に於ける午前と午後の微細な相場の變動を刻々に時間によつて報告し、又これを社内にゐる記者は直ちに原稿にして夕刊と朝刊の兩方へ漏れなく入れます。

又、外報部には外國語に堪能な記者が多くゐるのであります。こゝでは新聞に外國電報として現はれる記事が扱はれます。其の社から外國の主要都市へ派遣してある特派員（大新聞では、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリン、モスコイ等の全部或は一部へ特派員を配置してあります。或は外國通信社等から打電して來る外國のニュースを、外國語から日本語に翻譯したり、

註釋を附けたりします。その他、運動を専門とするもの、文藝、科學等を専門とするもの、論說を書くことを専門とするもの、毎日の新聞記事を切抜いて記者の參考資料を絶えず蓄積するもの、寄贈の新刊書を紹介するもの等、部門は幾つにも分れて、新聞に活字となつて現れる材料をせつせと作るのである。

併し、各部門が皆んな常に獨立して仕事をしてゐるワケではありません。この間に常に連絡と統一が保たれてゐます。殊に、非常な大事件になると、その活動は殆んど全社會的になつて來ます。例へば原首相の暗殺された時の編輯局内の如きは、給仕の末に至るまで全體の有機體の一つとして動き出します。最初の報道は、鐵道省詰めの記者か、或は日比谷署受持ちの記者により、『原首相が東京驛で何者にか刺された、重態らしい、犯人は朝鮮人だといふ、現場で捕はれたともいふ』と息せき切つて電話で報じて來る。これを聞いた社會部長は、『よし、直ぐに現場へ行つて呉れ、犯人の姓名と人物、傷の輕重、捕縛の有無を直ぐに探つてくれ、こつちからも直ぐに應援を出すと命じて直ちに居合せた社會部の記者二名に寫眞班を加へ自動車で現場へ走らせる。一方、警視廳詰めの記者に電話をかけ、刑事部で知り得る材料を直ぐに刻々に電話で報告するやう

命じる。整理部長と打合せ、號外の用意を命ずる。給仕は工場へ馳せつけてこの旨を職長に傳へると、號外發行に必要な準備を直ぐに整へる。庶務課の人は、この空氣を見て社屋の前方の窓から「號外發行」といふ常に用意してある長い布を下げる。これは折角號外を出しても號外賣が居なくては何んにもならないから、號外賣子の牽制法であります。その中、けたましく机上の電話ベルが二三ヶ所で前後して鳴り出す。居合せる記者等が、一齊に受話器を引つ攔む。——「うむ、うむ、犯人は朝鮮人でない、中岡良一といふ青年だ。と、深傷でその場で死んだ？」「なにッ？ 犯人は學生だと？ 今警視廳に連れてゆかれてゐる？」——「刻々と具體的のニュースが集ります。よしそれだけで第一號外を出さう、原稿は一枚つつ工場へ運べ！」給仕等は五間か十間の工場までの距離をマラソン競走の如く、號外の原稿を一枚つつ持つて走る。

それから、兇行當時の目撃者の談話が来る。暗殺の光景や場所が詳細に來る。原夫人がかつつけた人情味のある話がある。醫師の話が来る。第二の號外が直ぐに出る。この頃には、政治部の方では、直ちに原氏に最も縁故の深い政友、政敵の追憶談等を社會部と打合せて取りに出動するそれから内閣はどうなるか、差し當りの首相後任は誰になるかを直ぐに探りにかゝる。地方通信

部では、原氏郷里盛岡の通信員を電話で呼び出して同氏の實兄、姻戚者、市民の話や動靜等の報道を命ずる。寫眞班は兇行現狀跡の寫眞、原氏生前の寫眞、等を製版していつでも新聞に出せるやうに用意する。

宮内省記者は叙位叙勳の沙汰を聞きに行く。外報部は外國に於けるこの事件の反響を打電するやう特派員に電命する。經濟部は實業家の原首相觀や、その急死の財界に及ぼす影響等のニュース蒐集を初める。調査部は閱歴に就いての切抜きや書物を取り揃へる。營業局では地方通信部と協力して、各地の通信部及び販賣部支局に事件の概要を電話と電報で知らせ、各地で號外なりはり札なりをさせて地方の讀者に満足を與へるやう努める。……

大體右の如く、大事件となると全社を擧げて、それに向つて集中的の活動を初めるので、社内は全く戦争のやうな光景を呈します。

活字から新聞紙に

右に述べたやうな次第で原稿が出來るとそれを統一して直接紙面に現はす役を受け持つ編輯部

(或は整理部)の手に各部からうつします。この部では、原稿を受取ると記事の價値の大小を先づ考へて、それによりミダシをつけて、片端から植字係りへ廻はします。植字係は其の原稿を幾つにも分割して度人も活字を拾ひあげて、殆んど電光石火的に組みあげるのので、號外發行の時などは原稿が出てから刷り出すまでに二十分位でやるのも、一半はこの工場の早業に因るのであります。

編輯部の記者は、メ切りと同時に工場へ行つて組上つてゐる活字を、その日の最も重要なものを餘さないやうに排列いたします。この排列がそのまゝ紙面に現はれるのでありますから、これを擔當する記者は特別の技倆を要します。即ち、新聞の面が常に平板に流れず、變化と潤ひに満つるやうにするために活字やミダシの大小長短と、寫真や凸版などの配合を考慮します。この間に校正係は、原稿と活字になつたガラ刷とを比較して、數回誤植や落字の有無を點檢します。かうして、一頁大の活字の組みこみが終ると、次ぎにはその上に水に浸された特別の部厚な紙を重ねて、ブラシ様のもので叩くと、下の活字と同じ活字の凹面が出來ます。これを鉛版室へ運び高熱で乾燥し、今度はこの紙型を鑄造機に入れて、ぐらぐらに溶解してある鉛を注入すると、紙型

同様の鉛の版下が出來ますが、これは輪轉機にかける都合上半圓形に造られます。つまり、一面の活字面により幾枚もの鉛版が造られるのであります。

輪轉機に取りつけられた新聞用紙は、巻取と稱せられる圓く巻かれたもので、機械の廻轉に伴つて自動的に印刷され、新聞紙大に裁斷されますが、舊來の小型の機械でも一時間に一臺の輪轉機で一萬二千枚を刷り、高速度の大型なものになると二十萬枚から三十萬枚を刷り出し而もそれが、ちやんと疊まれて出て來ます。これから後は營業部の仕事で、それぞれ市内や地方へ自動車、時には飛行機により發送するのであります。

新聞製作意識

以上述べましたところによりほど新聞編輯上の主要要素は説明された譯で、従つて讀者は新聞はいかなる機關によりいかなる順序により造られるかを大體了解されたことと思ひます。然らば更に進んで、新聞全體はいかなる意識の下に造られつゝあるか、或は少くともいかなる理想の下に造らうとつゝあるかを説明して見たいと思ひます。

先づ第一に知らねばならぬことは、新聞紙の一面が商品であることであります。新聞社には編輯に對立して營業の部門があり、こゝで販賣により購讀料金を得、廣告により廣告料金を得て、新聞經營の主要なる營業を行つてゐるのであります。いかに好い新聞を造つても購讀者が少なければ、その新聞の勢力は従つて少く、又廣告するものも少く且つ廣告料金が低廉で、従つて其の新聞の經營は困難となります。併し多くの場合、好き新聞——即ちニュースが常に早くして正確言論が中正公平で、品位のある紙面——であるならば、それは長い間には社會の信用を得、紙數を増し、従つて經營が成立つて行くものであります。故に新聞社の編輯と營業とは、車の兩輪の如きもので兩々相俟つて始めてその存立を進めて行けるものであります。

新聞製作者は、常にこの新聞の營業的一面を顧みないわけには行かないのであります。即ち一枚でも多く賣れるといふことは、それだけ其の新聞の勢力範圍が擴大することである許りでなく、それだけ營業を助けることになるのでありますから、いかにして大多數の讀者を惹きつけ得るかといふのが、新聞製作者の第一の意識であります。併しながら、讀者の大多數の趣味性が低く、知識の程度が低い場合には、右の如き意識を餘りに多く働かせ過ぎると、その新聞は下品な興味

本位のものになつたり、煽動的なものになつたりします。「新聞は社會の反影」とはこれを言つたもので、堅實な國民性のイギリスには堅實な新聞が生れ、派手な躍進的なアメリカには同様な新聞が現はれてゐるのも不思議ではありません。

故に「大多數の讀者を得るため」といふ意識を働かせるにも自からそこに限界線がなくてはなりません。新聞が戀愛事件を報道するのは、それが常に人間の普遍的興味を中心であるからであります。併し、それを報道するに當つては、餘りに醜惡な部分は止さねばなりません。さうかと言つて戀愛事件の如きものや、其の他人間の醜い争鬭事件——裁判所や警察のタネの如きものは皆これに屬しますが——は悉く止めて、善事善行だけを載せるやうにといふ道學者の意見を實行したなら、大多數の讀者はその新聞を顧みなくなるに決つてゐます。つまりは新聞は忠實な社會象の反射鏡となる事を心がけて作るのであるが、そこに適當な指導的な判斷を記事の採擇の上に行つて行くのであります。その「適當な」といふ處が、新聞製作者によつて異なるわけで、新聞により特色や品位の優劣の起るものもこゝに基因して來るわけでありませぬ。

既に「大多數の讀者に」といふのが新聞製作者の第一意識である以上、他の製作方針、即ち意

識もこれから割り出されて来るわけでありませぬ。その結果、萬人向きの清新な材料といふことが常に考へられます。政治、經濟、社會、外交、藝術等にわたつて材料を取り入れるのもそのためでありませぬが、その各部門の中でも更に少しでも一般向きのものといふのが條件になります。例へば一人の平代議士やその家族に取つては、その人が議會中、病氣で議會に出られないといふ事は、最も重大な事件には相異ありませんが、社會全體の事件としては新聞に特報するだけの價値をつける事は出来ませぬ。ところが、十三四歳の少女がニセ札を使つて歩いたといふ事件は、單にその被害者の損害の問題許りでなく、社會上、教育上の重大問題でありますから、その意味で新聞製作者はこの一見小なる事件を大きく扱ひます。

又、ニュースでなくても、大多數の「利便」といふ事を常に心掛けます。主婦の家庭の心得、庭園の手入れや草花の作り方、天氣豫報、寒暖の報道、ラヂオのプログラム等を或は季節に應じ或は不斷に掲載するのもこれが爲であります。

其の次ぎには、趣味と娯樂も新聞製作者の主要な考慮を拂ふ點になつて居ります。講談、運動、競技、フィルム、劇、碁、將棋等に相當な欄を割くのもこれがため、小説や美術文學等の記事

も略ぼこれに近い意味で掲載されます。

故にこれを繰りかへして言へば、新聞製作者は讀者の大多數の利益を念頭において、事實の報道と利便と趣味の供給者たらんと努めるのであります。故に新聞が故らに私心を以てニュースを捏造したり抹消したり、或は俗悪な娯樂記事を掲げたりするのは、決して善良な新聞の道ではありません。新聞の品質の良し悪しを決定する事は、一家の主婦である婦人に取つても、家庭教育上日用品の品質を鑑別する以上に大切なことでありませぬが、それを定めるには右に述べた諸要項が果してどれだけ紙面に現はれてゐるかを、各新聞について研究して見れば、誰にも大體見當がつくのであります。

新聞の選擇法

新聞の良否の鑑別は新聞の讀方の根本をなすものともいふ可き重要なことでもありますから、ここに更に詳しく説いて見ませう。一概に新聞の選擇と言つても、讀む人の地位、境遇、趣味等により自然と變るべきものであります。こゝでは良家の家庭で、主人や主婦のみならず一家全體

の讀物として第一に講讀すべき新聞の選擇といふ意味で話して見たいと思ひます。

記事が正確である事

これは申すまでもないことですが、讀者はどうしてそれを鑑別することが出来るか。これは一つの新聞だけほか取つてゐない讀者に取つては、殊に『正確』であるか否かは容易にはたしかめ難いものであります。不正確な記事を平氣で報道するやうな新聞に限り、記事に誤を發見しても、或はそれがため被害者から取消なり正誤の申込を受けても、横車を押して潔く誤りを正すことをしないといふのが、遺憾ながら未だ現在の或る種の新聞の通弊であります。かういふ場合その新聞一つだけを讀んでゐる者に取つては、その讀者の判断力にも因ることではあります。毎日その紙面に現はれてゐる記事は皆尤もらしく思はれるのであります。これが一日や二日なら兎に角、何年か續くとすれば、常に誤れる若しくは虚偽の事實で、その讀者の知識の土臺が築かれる譯でありますから、これほど恐ろしいことはありません。故に大切なことは、新聞を選擇するにあつて、記事が正確かどうかを知るには、先づ以て是非世評に聽くといふ事であり、それには知人の間で數種類の新聞を併讀してゐる人に少くとも三四人に對して確める必要があり

ます。さうすれば、どの新聞が比較的最も正確であるかといふ見當がつく可き筈であります。これは一見何でもないやうな事でありながら、一般新聞講讀者が最も怠つてゐる點であります。

記事が穩健である事

これも『正確』といふことの次に大切なことで、多くの場合、『正確』を念とする新聞は悉くさうであるといつても好い位であります。これは『正確』かどうかを確めるよりも比較的容易なことで、少しく常識を働かせて新聞を見れば直ぐに判断はつきます。たとへば、労働問題が流行してストライキがはれば、その事許りが世の中の最大の事件であるかの如くに大きく誇張して扱つたり、心中事件があれば不必要な程度にまで詳細に報道したり、なくとも哉の寫眞をでかかに入れたり、或は好んで人の私事私行にわたる事でそれを報道して世の中に何んの益もない事を大きく書きたてたり——總ては皆讀者の興味に許り媚び訴へようとする種類の新聞は、他の新聞と比較して見るまでもなく、批評眼を働かして見れば直きにわかるのであります。恰度それは他人と話して居る場合にうつかりして、聞いて居れば、對話者のいふ事が皆ほんとうに聽えませうがこれは少しおマケがありはしないかと思つて、その氣で聽けば、そのオマケの部分は全體わ

かるやうなものであります。新聞製作者に取つては、新聞を面白く可笑しく興味本位に作ることは、正確を第一とし、穩健着實といふことを常に念頭に置いてつくる事よりも遙かに容易なのであります。なぜならば面白く人の注意を惹くといふ方が主なれば、些細な事にも正確を期するたゞめ諸方面に記者を出勤させたり電話をかけたたりする努力も省け、ミダシにしても何んの苦もなくすばく大きく最大級の形容詞を使ふことが出来るからであります。併し世の中は遊戯場やお芝居でない以上、正確穩健を主として新聞を作れば、勢ひその新聞は所謂地味な堅いものとなるのであります。なぜなれば、全體から見るとそれが人間社會の眞の相だからであります。だから、興味中心、誇張、センセーショナルを主とした新聞は、食物にたとへれば赤や青の色彩を美しくぬりたてた菓子や強烈な洋酒のやうなもので、小兒や心なき人はこれに惹きつけられ、米や水の如く一見平々淡々たるほんとうの滋養物が忘れられ勝ちなのであります。

趣味の片寄らぬもの

新聞の使命の第一が世の中の出来事を公平な第三者の立場から報道し論評すべきものである以上、一黨一派の所有であつたり、或はそれに偏してゐる新聞は其の點に於て缺陷があるものとい

はねばなりません。平常はなんの事もなくとも、その屬してゐる黨派の死活問題に關するやうな事件の起きた場合には、その新聞の報道や論評は偏らざるを得ません。これはその新聞の立場としては、當然過ぎるほど當然なことであります。故に中央に於ても、地方に於ても、(地方には殊に政黨の機關紙が多い)或る新聞を取らうとする前には、その黨派關係を先づ知らねばなりません。それで、何かの事情でさうした新聞を読まねばならないとすれば、その新聞が直接利害關係があると思はれる記事は、割引きして讀まねばなりません。例へば政友會内閣の時に、民政黨の機關新聞は、常に政府とその與黨に對して反對的な記事に主力を注ぎます。その新聞が見識低いものであればある程、政黨の攻撃記事に没頭します。讀者がこれを其のまま信ずれば飛んでもない事でありませんが、それをどれほど割引きしていか判断に迷つて來るのも當然であります。だからさうした手数を省くといふ點からも、不偏不黨の新聞を擇ばねばなりません。次に、政黨政派のみならず、一般的に言つても記事が一方に偏する新聞は好ましくありません。例へば、或る新聞は演藝とか文藝とか、或は花柳界の消息に主として力を注ぐ、又或る新聞は政治、外交、經濟の方面のみ重きを置き、又或る新聞は社會部的の記事のみ力點を置き外

國の事情等には全然無關心なものもあります。これは勿論新聞製作者としては、却つてそこにそれぞれ特徴を發揮し、多くの場合それによつて讀者を惹きつけてゐるのでありますから、一面無理からぬ譯であります。併しかうした新聞は他の新聞と併讀して始めて、その効があるもので、多くの新聞紙の中から、第一に選擇すべき新聞としての條件には遠ざかつてゐるものといはねばなりません。新聞も人體や美術品と同じく、そこにあらはれる記事は均整がとれてゐなくてはなりません。政治、外交、經濟、社會、文藝、思想、趣味、實益等の記事が適當な割合で載つてゐるものでなければなりません。なぜなれば、若しもその新聞一つを取るとすれば、その人の知識なり趣味なりは勢ひ偏らざるを得ないからであります。故に新聞の選擇に際しては、この點も必ず留意すべきで、それは一枚の新聞を注意して見たゞけでも、大凡その鑑別はつく筈であります。

其の新聞が人格を

「文は人なり」或は「文章は人格の表現」とかいふのは古來からの至言であります。新聞も一面文章の集積である以上、そこに新聞製作者、即ち其の新聞社の人格が現はれてゐるものであります。新聞としては、前記の條項に當てはまつてゐるだけのものであつても、それは善良な新聞

といへることが出来ます。恰度それは個人に例へて常に動靜座臥實着で、良き働き手で、萬遍な常識を備へたやうな人物であります。併し、人間としてこれだけでは充分でないやうに、社會の公機たる新聞としてもこれだけでは充分ではありません。個人としても新聞としても、も一つ必要なことは常に一つの理想を持つてゐることです。國家社會、或は言ひ換へれば、人類文化の向上發展と云ことを常に念頭に置いて事物觀照の基準とする事が新聞紙としての理想でなければなりません。この理想なくしては、新聞記事の正確、穩健、不偏といふやうな事も實は漫然として倚りどころのないものとなり勝ちだからであります。理想あり勇氣ある新聞は、時として他の新聞が誇大に掲載する興味中心の記事を自ら全く捨てたり、或は官憲の不興を蒙るやうな論議をも敢然として試みます。

人格のある新聞、理想と一定の主義主張ある新聞であるかどうかは、其の新聞を相當の期間注意して讀めば自らわかる事です。即ち或る時は勞働運動を禮讚するかと思はれる記事や論説を掲げたかと思ふと、其の後では右傾體の苦がくしい行動を是認するとか、國際協調主義を唱へてゐるかと思ふと無暗に軍備擴張を主張するとか、或は論説で社會人心の浮華輕佻を攻撃

しながら、記事面ではそれを流行させるやうなものを平気で載せて行くといふやうな新聞がありとすれば、それは理想も主義もない新聞か、或はその社の内部が不統一で理想主義が一貫してゐない證據であります。

以上が、新聞選擇に關する私の考であります。こゝに附け加へて置きたいのは、一つの新聞を擇ぶといふ事は、精神的の師友或は配偶者を取ると同じことであるといふことであります。我々が人格なき、出鱈目を平気で常に放言し、面白ろ可笑しきおしやべり者を自分の師友、配偶者として排斥するならば、それと全く同じ意味で新聞の選擇には周到な用意をし、その身元、人物、品行を調査しなければなりません。家庭の子女の教養を念とする者に取つて殊にさうであります。朝に夕に、あれだけの印象深い無数の文字、寫眞、繪等が一年、五年、十年、二十年、三十年と間斷なく讀者に迫る影響を考へてごらん下さい。

新聞の読み方

新聞の読み方も、その選擇と同様、その人、人々の事情により變るのは自然で、一定した方法といふものは素よりの筈であります。こゝには、家庭の婦人が専門的の見地からでなく、一般教養、娛樂のための新聞の読み方に就いての私見を述べて見ませう。

先づ心構へをしつかりと

いかなる事でも、それをするに當つて確として心構へが必要であるといはれますが、新聞を読むに當り同様のことをいふ人のないのは、新聞に對する理解が足りないからであります。考へてもごらん下さい。一種一ヶ月一圓の新聞を假りに、中學卒業直後の年輩から七十歳前後まで自分の金で講讀するとすれば、一ヶ年十二圓づつ五十二年間支拂ふことになりますから、六百圓以上の額に上ります。更にこれに費す時間を、速讀の人で朝刊、夕刊合せて一時間とすれば、五十年間には一千八百二十五時間となります。遅讀の人、或は精讀の人で一日に二時間を費すとすれば、同年間に三千六百五十時間になります。これは可成り多額の金額と莫大な時間といはねばなりません。この一事だけを考慮しても、苟くも新聞を讀むとすれば、いかにして之を最も有効に利用せねばならぬかといふ事を先づ以て決心する必要があるあります。

新聞が書物や雑誌と異なる主なる點は、無論ニュースの報道を迅速にするといふところにあります。すが、もう一つ重要な特異點は毎日朝夕、間断なく連續されて發行するといふところにあります。近頃、西洋の或る新聞で、パイプを新聞で毎日一節か二節位づつ連載してゐるのがあると言ひましたが、これは新聞の連續性を利用して、毎日断片的な時間を活用して全パイプを讀まんとする讀者の便に供したものでせう。「塵積つて山となる」といふ古諺は、新聞を讀む者の朝夕應用すべき眞理であります。

全般的に先づ讀むこと

一般常識教養の具として新聞を讀む以上、そして既に一方に偏重しない新聞を擇ぶ以上、出来るだけ紙面全體にわたつて先づ一通り眼を通して、その日のニュースの最も大きなものから順を追つて讀むのが望ましいのであります。人情の常として、えて讀み易いもの、軽い短いもの、興味中心のもの——例へば小説、紙面の隅にある閑談、ゴシップ式のもの、文藝雜文等のものから讀み始める讀者が可成りありますが、これが習性となつて、最も主要なもの、堅い記事などから讀み始めることが出来なくなつて了ふのであります。誰人にせよ、その時間と精方は限りがあ

りますから、かういふ讀み方をする者は、勢ひ重要な記事は讀み落したり、或は粗雑に讀んだりする習慣が同時にいつて了ひます。政治、外交、經濟等の記事でも、始めの中は興味がなくとも、勉強のつもりでつとめて理解しようと思つて讀みさへすれば、小學校以上の教育のあるものなら分つて來ます。興味は總て理解から來るのでありますから、始めの中、興味がなからと言つて讀まずに終つては、いつ迄たつても駄目であります。一つの新聞を取つて、社會部の興味中心の記事や、小説、講談、雜文のやうなものだけを毎日拾ひ讀みするのは、西洋料理なら、菓子、コーヒー、果物等のデザート・コースだけを食べてゐるやうなもので、ほんとうの滋味ある品を全く閑却すると同様であります。吳々も注意いたしたいのは、習慣の力により、堅いものから柔いものへといふ順序をつくること、それにより國內國外の世の中の動きの大體を常に知るといふ心掛けであります。

精讀記事と切り抜き

新聞を十ヶ年精讀すれば博士になれるといふ人があり、又某博士はそれでなつたともいはれてゐます。いかなる記事を精讀すべきかは、その人々により異なるのは當然であります。兎に角全

紙面にわたり一通りその人の時間の許す範囲内で速讀したら、その中の一二の記事で自分に取り
 主要なものは精讀し、切り抜いて置くといふ事は、後で非常に役に立つものであります。この切
 抜きはたまればたまる程役に立つものであります。必ずその日の中にやつて了ふことが必要で
 あります。後でと思つて、一週間も十日もためて了ふと、特別な長い時間と労力が必要になつて
 来て仲々出来なくなるのは、私の度々實驗して來たところでありました。又、新聞を一ヶ月位づつ
 綴りこんで置くことも、新聞を注意して讀む者には非常にいい事で、多忙で讀めなかつた日の新
 聞を閑な時に讀むことが出来、参考にしたい箇所など繰り返へして再讀する便宜があります。綴
 り込みをする人は、毎日讀んだ記事で目星しいものへは印をつけて置くことが、後で繰り返へす
 にも、切り抜くにも便利であります。

論説と其の時々の大問題

毎日でなくても、新聞には大抵の毎月何かしら、その時々の大問題として取り扱はれる記事が
 數回出るものであります。それが、興味中心のものであれば誰も逃がしません。政治問題とか
 外交問題とかいふ種類のものであると、前後の關係がわからなかつたりして、そのまゝに、其の

問題の終るまで讀まずに了ふものが、婦人の間に、殊に多く見受けられるやうであります。これ
 は、大問題として取扱はれるまでに度々出てゐる時の記事を読まないからで、さういふ時はつと
 めて、前後の關係を周圍の人に聽くなり、自ら調べるなりして、その問題の推移を知るやうに勉
 めたいものであります。なぜなれば、新聞に現はれる大問題は、大體に於て常に其の國なり社會
 なるの當面の大問題で、それを理解して行くことが、公民の第一の常識だからであります。さう
 した記事の理解を助けるものは論説であります。最近の新聞の論説は、單に或る問題についての
 筆者の意見や主張許りでなく、解説を主としたものも可成り多くあります。又、さうでないもの
 も論説は多くの場合その社の主幹部の記者が、他の記事よりも更に注意して書き、社の代表意見
 として發表するものでありますから、これにより時事問題に對する觀方や批評眼を與へられる利
 益があります。更に又、これにより前述の「新聞の人格」の有無等をも推定することが出来ます。
 近來ともすれば、新聞の論説が讀者、殊に婦人の讀者により省みられない傾向のあるのは惜む可
 きことで、これは一つは論説そのものゝ文體が固過ぎるといふ理由にもよりませうが、も一つは
 讀者がかうした讀物を後廻はしに過ぎる習慣から來て居る事も否めません。

閱讀の時間と時刻

これもその人の境遇により一定する事は勿論出来ませんが、食事中とか黄昏時の光の不充分な時刻とかは衛生上から無論避く可きであります。その他は、その人の職業、地位、境遇に應じて、續けても或は断片的にでも速く讀める習慣をつける必要があります。速讀といふ讀む上の習慣（或は技術）は歐米の學校ではファスト・リーディングと稱して一定の時間に非常に多數のペーシを讀んで内容を正確につかむことを教へてゐるところが澤山あります。これは新聞の種類を多く讀む人には殊に大切なことで、若しこの習慣がつかなければ、毎日三四種の新聞を朝夕讀むだけにも二三時間を費すやうなことになります。理想としては朝刊新聞八頁として、廣告までいれて全面にわたり眼を通して、内容の大體を正確につかむ程度の時間は三十分以下、夕刊四頁なら二十分以下でありたい。併しこれには可成りの習熟を要する事で、それは努力にまつの外ありません。新聞が速讀に適してゐるのは、書物よりも多くのミダシによつて大體の内容は分るやうになつてゐるのでありますから、この速讀の習慣は新聞を讀む上には容易につき得るのであります。又、それにより書物を讀む上に同様の利便を得ることが出来ます。

具體的の注意と參考

以上は新聞の讀み方の一般的な注意であります。紙面若しくは記事の種類により讀み方の上の注意を述べて見たいと思ひます。

朝刊と夕刊を讀む注意

東京でも地方でも大新聞は、大てい朝刊と夕刊とを一社で併せて發行してゐますが、これは讀者として讀む上に左の如き豫備知識が必要であります。

夕刊は元來ニュースを一刻も早く讀者に提供したいといふ最近の新聞紙の職能を端的に實行せんとする意志から起つたもので、其の日の出來事をその日に報道するといふところに特徴があります。相場とか運動競技の勝負とかを其の日の中に知り得るのは勿論、東京市内なら午後二時頃までの重大な出來事は夕食前に夕刊により知ることが出来ます。故に夕刊製作者は期せずして拙速主義にならざるを得ません。午前の九時十時頃までの事件なれば兎も角、午後一時半頃の締切りに間に起きた事件でも、製作者は無理をしてもこれを載せて了ひ度いと努めます。だから朝刊

製作の長い豫備時間に比し、調査や記事の書き方が比較的充分不行届きになるのは、勢ひの自然であります。も一つ夕刊の特徴は、全體の紙面の調子、即ち材料の選擇法、ミダシのつけ方、大きさが好くいへば派手、悪くいへば誇張的であることも事實であります。これは獨り日本計りでなく、歐米諸國に於ても夕刊は皆悉くさうなつて、同一社から出る新聞でも朝刊は堅實、夕刊は派手といふ感じを一般に與へ、事實又さういふ意識の下に作られつゝあるのであります。一日の仕事に疲れた讀者の前に出すのであるから、堅いものよりは柔い読み易いものといふ製作者の意識が一般的に働いてゐるからで、讀者が又これを歡迎する事も事實であります。

この夕刊の特徴（即ち朝刊の缺點で、同時に夕刊の缺點は朝刊により補はれてゐると言ふことも出来ます。夕刊を読む上には、この事は常に頭へ入れて置く必要がある事で、夕刊の或る記事の更に正確な報道や誤謬は、朝刊により手際よく、製作者の一種の自負心から、夕刊所報の誤謬は正面からはいはずに）追加して報道され或は訂正されます。地方で朝刊と夕刊が同時に配達されるところでは夕刊の方から読み始めて朝刊に續くのが順序で、さうでないといふと議會記事など連絡が全く前後します。

責任を持つ記事

勿論、嚴格にいへば新聞に掲載された記事は總て其の新聞が責任を持つわけでありませんが、いはば直接にそれを持つのと、間接に持つのとあります。各紙面を通して、各官廳、始め銀行、會社、公私の團體、或は個人等の名により發表されるものは、その發表者の責任であります。又發表ものでなくても、「何々氏談」とか、「某當局談」とかいふ「談」のつくものは、新聞は其の責には直接任じないといふ意味が自然含まれてゐるのであります。（勿論「談」として出ても、その内容が談話者の言つた事に相違してゐる場合はその點につき新聞が責任を有つことはいふ迄もありません。）

政治部の記事

この部の記事としては、内閣、貴衆兩院、各官廳、政黨等に關し一般政治外交に屬するものがそれで、問題は可成り複雑して多岐多様に涉つて居ります。これを讀んで行く上の注意は、大體日本の政治はどういふやうに動き、どれが政界の最大問題であり、政界の潮流はどの方向へ向ひつゝあるかといふ事を常に念頭に置くこととあります。これはひとり政治部に限らず、他の部の記事に就いても同様のことがいへるのであります。殊に政治外交の記事は國民生活の上に関

係が密接であるのと、その方面が多いためこの注意が先づ必要であります。一年を通じていへば、議會の開かれる前、即ち十月頃から議會開會中が所謂政治季節で、この頃から政府を初め各政黨は議會に臨む準備に忙しくなります。議會の問題の中心である來年度の豫算の編成發表につれ、これに對する各政黨の態度、對案が新聞に發表されます。近頃の議會が政争に没頭して眞面目な政策の公争よりも、卑屈な問題を中心とした鬭争そのもののみ熱中してゐますが、一個の政治の中心點の一つは、この豫算問題なので故に政治記事を読むには、政府提出の新豫算と各政黨の態度の大體を正確に知することに努めねばなりません。

次に、同じ政治季節に於て、殊に各政黨は其の政綱なるものを發表し、各黨首や領袖は或は演説に宣言にその黨派の主張なるものを發表します。かういふ發表は多くの場合皆無味乾燥なものであります。これにより各黨派の存在の理由が或は（存在の必要ないことが）わかるので是非氣を留めて讀まねばなりません。

外交問題は、多くの場合新聞により先づ度々報道されてから、外務省の發表により公式の経過かと落着とかが分明しますが、これは外國を相手だけに、外國電報により大ていの場合其の経過

の大半が報道されます。故に新聞に出る海外電報は、苟くも外交事情を知らうとする者には細大となく注意して置かねばなりません。これも他の或る記事と同じく、平素外交關係に就いて一般的の豫備知識を養つておいて始めて相當の理解を得られるものでありますから、その平素の注意が肝要であります。

社會部の記事

この部の記事は讀んで理解して行く上には最も容易なタネなり、書き方でありますから、その方の困難はない筈であります。たゞこの部の記事を讀んで行く上に、留意して行く可きは、小説や隨筆を讀むやうな興味に許り捉へられず、いはゆる世相のうつり替はりを、それ等の記事の中から推斷して行くといふ心掛けであります。強盜殺人事件數の多少、特殊な美事善行の話、勞働争議の増減、或は各種各方面の流行の様式等何れも皆、この部の記事は世相を如實に示してゐます。も一つ、この部の記事を讀む上に重要な事はその文章の表現上の工夫であります。現在の日本の新聞では該部の記者は、他の部の記者に比較して遙に多く文章の書き方や表現に特別な努力をしてゐます。故に日本の新聞の新文體はこの部の記事の特徴で、子弟の文章上の練習を望む

者に取つては、適當な例を選べば生きた好材料となります。

經濟部の記事

現在の一般新聞で經濟面と呼ばれてゐる紙面の半は私經濟に關すること、即ち商人、工業者、金融業者等私人の經濟活動に關する記事で、事は始めから夫等の専門業者のために製造されてゐます、一般婦人讀者としては、これ迄理解に勉める必要はないと言つても差支へない譯であります、但し、最近はこの紙面も一般讀者に向く啓蒙的な經濟記事に各紙が努めてゐますから、さういふ記事は經濟知識を養ふ上にも是非讀む必要があります。

これを要するに、新聞の記事を讀み、これを理解し消化して行くといふ事は一見容易なやうで、決してさうではありません。書物を讀むと同様、新聞を讀むにも常に二三種の参考書があつていゝわけであります。例へば貴族院の改革といふ事が問題になつた場合、新聞は毎日貴族院議員の選舉法令や貴族院令の要點でも掲載しません。又、兩院の黨派に關する記事は毎日出て、新聞は毎日さういふ黨派の分野や所屬議員數を掲げません。其の他類似の例はいくらもあります。

が、さうした場合には、讀者は年鑑の如き書物を一冊座右に置けば、たやすくそれにより基礎知識を得る事が出来ます。簡単な百科辭典や法律經濟辭書といふやうなもので信用ある書典は、新聞を理解して行く上に必要なものと思はれます。繰り返していへば、新聞記事の或る部分は娛樂的讀物、或は何んの努力なくして讀める讀物で埋つてゐますが、他の大半は研究的態度で讀むことに依つて、はじめて讀者のものになるといふ事を忘れてはなりません。

以上は新聞の記事のみに就いて述べて來ましたが、新聞の紙面には記事の他に廣告面があり、記事面の中にも挿入された廣告があり、重要な場面を紙面の上を取つて居ることを閑却することが出来ません。廣告は新聞社の營業中販賣部と並んで、その收入を圖る兩大關で、この一部門だけでも立派な研究題目になつてゐます。新聞の讀み方といふ點からいへば、廣告も亦一種の記事である場合があります。貸家、貸間、賣家等雑多な案内廣告の如きは多くの讀者にとり記事と同じ價値があり、一般商品の廣告も購買者にとつては同様であります。併しこゝでは、單に廣告も記事と同様注意して必ず一通り眼を通すことが、新聞を充分に讀むといふことになるといふだけを附言して置きます。(了)

社會教育パンフレット 既刊目錄

●印 特輯號、○印 倍大號、其他は普通號

- 第一輯 ○中等學校生徒思想調査
- 第二輯 ○青少年と活動 寫眞
- 第三輯 入學試験に關する調査
- 第四輯 中等學校生徒思想調査批判
- 第五輯 ●社會教育ボスター集
- 第六輯 不良少年に關する調査
- 第七輯 職業婦人に關する調査
- 第八輯 體育運動團體に關する調査
- 第九輯 ○宗教類似團體調査
- 第十輯 ●青年訓練 義解
- 第十一輯 勤儉獎勵に關する施設
- 第十二輯 壯丁の教育程度調査
- 第十三輯 米國の經濟的優勝
- 第十四輯 勤勞學校とはどんなものか
- 第十五輯 知識階級の失業問題
- 第十六輯 獨逸の成人教育運動

東京帝大助教授

文部省普通學務局

青木 誠四郎氏

文部省學校衛生課

社會教育談話會

文部省普通學務局

文部省普通學務局

中央職業紹介事務局

文部省學校衛生課

社會教育協會調查部

文部省普通學務局

內務省社會局

文部省普通學務局

內務省社會局

文部省實業學務局

文部省普通學務局長

社會局社會部長

守屋 榮夫氏

武部 欽一氏

內務省社會局長

文部省實業學務局長

- 第十七輯 勞農 ロシアの教育
- 第十八輯 映畫 と 教化
- 第十九輯 ○英國の成人教育運動
- 第二十輯 少年職業に關する調査
- 第二十一輯 ○米國の成人教育運動
- 第二十二輯 職業指導と適性検査
- 第二十三輯 ペスタロッチと勤勞學校
- 第二十四輯 現代青年の職業思想
- 第二十五輯 佛壇の成人教育運動
- 第二十六輯 新聞紙の自由と拘束
- 第二十七輯 普通選舉法の大意
- 第二十八輯 我國の勞働者教育
- 第二十九輯 英國農村の教育
- 第三十輯 我國の失業保護施設
- 第三十一輯 ○配偶者の選り方
- 第三十二輯 獨逸青年の理想
- 第三十三輯 日用品の購買組合
- 第三十四輯 米國の職業指導

社會教育協會調查部

文部省民衆娛樂調查委員

文部省普通學務局

中央職業紹介事務局

文部省普通學務局

中央職業紹介事務局

武部 欽一氏

青木 誠四郎氏

文部省普通學務局

美土 路昌一氏

扶 間 茂氏

松下 芳男氏

文部省普通學務局

內務省社會局

越智 眞逸氏

文部省普通學務局

井 關 善一氏

三澤 房太郎氏

文部省普通學務局長

東京帝大助教授

東京朝日新聞主幹

內務事務官

醫學博士

內務省社會局

農林事務官

內務省社會局

第卅五輯 失業問題と其對策
 第卅六輯 金融恐慌と其教訓
 第卅七輯 衛生上よ 兒童の保護
 第卅八輯 各國の成人教育
 第卅九輯 未開人の徳性
 第四十輯 我國の壯丁教育調査(大正十五年度)
 第四一輯 全國女子青年團體概況
 第四二輯 新聞の常識

社會局社會部長 守屋榮夫氏
 第一銀行取締役支那人 明石照男氏
 文部省學校衛生官 大西永次郎氏
 南洋傳道團宣教師 文部省普通學務局 山口祥吉氏
 文部省普通學務局 文部省社會教育課 鈴木文四郎

次號豫告

(十二月五日發行)

海外の開拓

第四十三輯

社會局 社會部長 守屋榮夫氏

入會案内

會員

本會はどなたでも本會の趣意に賛成して御入會下さるのを歓迎いたします。入會書はハカキに住所、氏名、業務を記し、調印の上御差出し下さい。振替用紙の通信欄に記載されるも結構でございます。

會費

一ヶ月五十錢、半年參圓、一年六圓、總て前金のこと。御送金は本會振替口座を御利用下さい。最も確實で經濟でございます。

特典

會員には社會教育パンフレット及び民衆文庫を毎號無代で配布します。會員の希望に應じ、講演會、展覽會、映畫會の幹旋及び社會教育に關する諸般の調査をいたします。

昭和二年十一月十八日 印刷
 昭和二年十一月二十日 發行

社會教育新聞社

編輯發行人 小松謙助
 東京市京東區川石小市山白殿町百七廿番地
 印刷所 中外印刷株式會社
 東京市京東區川石小市西區川吉町二十五番地
 發行所 財團法人社會教育協會
 東京市京東區川石小市山白殿町百七廿番地
 電話 小石川五七九
 振替口座 東京一八三

會員に頒布

終

